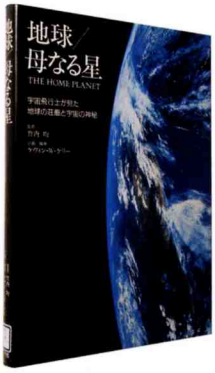

地球/母なる星：宇宙飛行士が見た地球の荘厳と宇宙の神秘

ケヴィン・W・ケリー企画・編集
田草川弘[ほか]翻訳
(小学館 1988.12)

漆黒の宇宙の闇の中で内部から光を放つ青いガラス玉のように輝く地球。その青い球は透き通るほどに美しく澄んでいて繊細ではかなげだ。だが、その一方、地球はなんと生命にあふれ、力強い存在なのだろう。

飛行機に長時間乗って旅していると不思議な感覚を味わう。地上から離れ、全ての現実やしがらみから解き放たれたような解放感と、それでもやはり自分はまだ大気圏内にいて地球の懐に包まれ、守られているという安心感。地球―母なる星。この本には宇宙飛行士たちの言葉がそのまま言語で語られている(翻訳付)。彼らの率直な声と迫力ある写真の数々は地上の現実生活に疲れた時には心を癒やし、狭くなった視野を広げてくれる。思考力が弱まった時には活力とひらめきを与えてくれる。もっと優しく、もっと強くなれる気がしてくる。宇宙飛行士の言葉をひとつ紹介しよう。

宇宙からながめた地球は、たとえようもなく美しかった。
国境の傷跡などは、どこにも見当たらなかった。
ムハメッド・アーマッド・ファリス
シリア

2階書庫大型本[450 ‖ C44]

遠藤里香(大学院外国語学研究科2年)

あんじゅう：三島屋変調百物語事続

宮部みゆき著
(中央公論新社 2010.7)

「百物語」と聞いて、皆さんはどんなイメージを持つでしょうか。「こわい」「おそろしい」「奇妙」。きっと多くの人がホラーのイメージを持っていると思います。しかしもし、そんな怖さの中に温かさがあったのなら――。この作品はそんな百物語をテーマにした、前作『おそろし』から続く連作短編集です。

物語の語り手、三島屋のおちかのもとには、不思議な百物語を持ったお客が次々とやってきます。不思議な水、解けない呪い、謎の黒い塊、そして村の仏の秘密……。とある理由からその百物語の聞き手となったおちかは、お客の心の底にしまいこまれた奇妙で、不思議な物語の数々を聞いてゆきます。

私がこの作品で特に感じたのは、その中で語られる妖怪や幽霊といった人ならざる者たちの物語には、必ず人間の温かさや恐ろしさ、強さや弱さといった感情があることです。「百物語」の中には、隠された人間の心情が混じっていて、それがこの作品を読んだ人の心にじんわりと、しんみりと響いてゆくのです。

春を迎えた今、季節外れのゾクッとする、けれどほっこりする話を読んでみてはいかがでしょうか。

第2開架閲覧室 [913.6 ‖ Mi71]

小林央昌(経済学部2年)